

寄 稿

適正な選考とは？

私は1989年から21年間、本財団の選考委員を勤めさせていただいた。就任当時の私（46歳）にとって、助成申請を評価するという仕事は「大変なこと」であった。

勿論、それまでにReviewerやAssociate Editorとして専門誌の編集にかかわっていたから、研究の評価という事には一応慣れていたはずである。しかし、論文が「やってしまった研究」の報告であるのに対し、助成申請は「これからやる研究」の計画である。

その分不確定要素が大幅に増え、選考委員には色々な面での推定・予測能力が要求される。しかも、本財団では「人間と機械の調和」という大きな目標が掲げられている。この大目標と研究計画についての標準的評価項目との折り合いがまた難題であった。試行錯誤の結果、“新規性・独創性、学術的・社会的意義、計画の具体性・実現可能性などの標準的評価項目を一定レベルでクリアしているものについて、「人間と機械の調和」の視点から順位を付ける”という自分なりの方針を決めて選考にあたることにした。

さて、実際選考会議に出席してみると、葉原委員長が見事にご指導くださり、他の選考委員の方々との議論の中で結論に辿りつけば良いことがわかり、大変さも薄れていった。しかし、ある年、自分が委員長になってしまい、「大変なこと」が一気に蘇ってきた。選考委員を離れたいまも、“どうすれば適正な選考が出来るか”という問題には結論を出せないままである。

現在は評議員を務めさせていただいている。その役目は“財団が道を外すことがないように監視する”ことと理解している。これは、生起確率実質0の事象を監視することであるから、かなり気楽に会議に出席させて貰っている。



京都大学 名誉教授・
松江工業高等専門学校 名誉教授 荒木光彦（評議員）